



作中人物は生きているか I I :
学生レポートからみた生きている作中人物

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西原, 千博 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.32150/00007305 |

作中人物は生きているかⅡ

— 学生レポートからみた生きている作中人物 —

西原千博

I

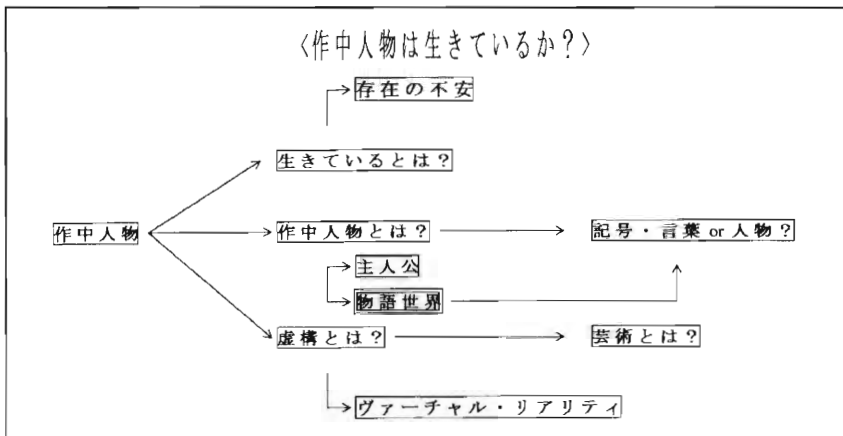
本稿は、北海道教育大学札幌校の「表象文化論A」に提出された学生のレポートを中心として、作中人物・キャラについて考察したものである。「表象文化論A」は2005年度に試行的な短期の授業を行って、2006年度から教養教育の講義として開講された。この間の講義のテーマは「作中人物は生きているか」であった。表象文化論といっても文学、映画、絵画、マンガ、アニメなどその対象や、取りあげるべきテーマも多岐にわたる。そこで、この講義ではそれらの表象文化に共通するものである作中人物を取りあげ、さらには「作中人物は生きているか」をテーマとした。言うまでもなく、このようなテーマはいささか突飛なものだろう。実際、授業の最初で学生たちには戸惑いも見受けられた。しかし、これまで小説の評価において、「作中人物が生きている」という言葉はよく使われてきたのであり、最近でも、マンガの批評において「作中人物が生きている」(=「キャラが立っている」)などと言われている。例えば、鳥田一志は佐藤秀峰の『ブラックジャックによるしく』(講談社)の人物たちについて「いずれにしてもこの作品に出てくる人間たちは『生きて』いる。」(『COMIC IS DEAD』—STUDIO CELLO—)と述べている。あるいは、鳥山明の『DRAGON BALL』(集英社)の人物たちについて「登場人物がみな活き活きとしていて、キャラが立っている」(同書)とも述べている。無論、これは比喩的に言われているのであって、実際に作中人物たちが生きていると思っているかどうかは解らない。しかし、この講義では、この比喩的に言われた言葉を文字通りに捉えようとしたものである。また、これまでの「生きている」という批評が主観的なものであり、文学の評論家やマンガのオタクたちだけが解る特殊なもので、いわゆる一般読者(この講義の履修者)には、なかなか実感することができないものもある。多くの本やマンガを読むことで、何となく経験的に解った気がする程度のものにすぎない。それを、なんとか客観的に提示することができないかを講義の目標とした。とはいえ、とても現時点では、この目標を達成することはできていない。また、このことについては、すでに拙稿「作中人物は生きているか—実存的作中人物論序説—」(「札幌国語研究」第3号 平成3年5月)で論じたことがある。ここでは主に理論的側面についての考察を行った。そこで、今回は具体的な例をもとにこの問題についてささやかな考察を試みたい。そして、その具体的な例というの

が学生たちのレポートなのである。

この講義では学生たちに「生きている作中人物を探せ」というテーマでレポートを書いてもらっている。学生たちには、あらかじめ「作者の支配を離れて、自立している。」「作中人物と自覚している。」「読者が生きていると感じる。」「現実世界とリンクしている。」「物語世界で成長している。」という5つの「生きている作中人物」の条件を与えてある（詳しくは後に述べる）。それはあくまでもヒントとして提示したにすぎないのであり、絶対的なものとしたわけではない。（ただし、後で述べるように、学生たちにとっては絶対的なものとして受け取られたきらいはある。）また、半期間の講義で、生きている作中人物とはどのようなものかを、具体的に示している。当然、生きていることを証明することが困難であることも伝えている。それらのことが学生たちの先入観ともなっているだろう。しかも、成績のためにはレポートを出さなければならないのだから、無理にでもこのテーマにふさわしい作品・作中人物を探すべく苦勞しているのであり、果たして純粋に彼らが作中人物を生きていると思っているかは疑問が残るところでもある。（この点についても後に触れる。）ともあれ、学生たちは以上のようなことをふまえて、マンガや小説などから生きている作中人物を探して、レポートにまとめたのである。この学生たちのあげている具体的な例から、「生きている作中人物」ということの意味・定義を考察することになるのだが、それはまた、すでに5つの条件から派生したものであっても、いわば演繹法と帰納法が混乱して使われているようなものでもある。その点で言えば、本稿は考察と言うのも烏滸がましいものであり、レポートの簡単な紹介にすぎない。むしろ、具体的な例を見ていただいて、この不可能な考察へのアドバイスをいただきたいというのが本音なのである。

II

講義の概要としては以下の図を作成し学生に提示している。



理論的な点については、先に挙げた論文で述べたので、ここでは簡単な説明にとどめたい。「作中人物が活着ているか」を考察するためには、まず、「作中人物」とは何かを考察しなければならない。その際には、「主人公」などについても考察することになる。特に、「作中人物」については、言葉なのか人物なのか、という問題が中心となる。単純に言ってしまうえば、言葉・記号ならば活着ているとは言えないし、人物ならば活着ている可能性がある。この講義では、どちらなのかというよりも、両方の側面があり、両者を相補的に捉えることが必要だとした。そのために、作品を作品と作品内の物語世界との二重構造として捉えることを示した。簡単に述べれば、作品においてはあくまでも言葉であり（作品は書かれたものであり、作者＝書き手によって作られ支配されている）、それに対して物語世界においては、作中人物たちは人物として活着ているのではないか、ということである（こちらは語られたものであり、語り手が支配する、それはまた、演劇の舞台に相当する、舞台における登場人物たちは当然活着ている。この点でいえば、作品は脚本に当たるだろうか。）ここでは、作品と物語世界を二重構造として捉えているが、深層構造と表層構造としても捉えられるものでもある。しかも、この二重構造は小説に特有なものではなく、マンガでも言葉の代わりに図像があるだけで、さほどの違いはない。映画ならば、そのスクリーンこそ物語世界ということになるだろう。無論、このような捉え方は杜撰かつ図式的すぎるだろう。けれどもこの講義の目的はその先にあるのだから、先を急ごう。

次に問題となるのは、そもそも「活着ている」とはどのようなことか、ということである。人工生命などの最近の科学的な知識などを取り入れて考察するが、最近の科学でも当然のことながらこれを定義することはできていない。学生たちには、例えば「たまごっち」は活着ているか？などということを考えてさせている。犬や猫のようなペットが死んで悲しむことと、「たまごっち」が死んで悲しむことが等価なものならば、「たまごっち」もまた活着ているのではないのか、ということである。といっても、多分そのようなことを彼等はこれまで一度も考えたことはないだろう。さらに、この「活着ている」ということを考える際に、いわばその逆のこととも言える、「存在の不安」についても考えなければならない。というのも、「作中人物は活着ているか」という問は、往々にして「自分たちのように」という言葉をともなって考えられるからである。しかし、では自分たちは「活着ているの」か。活着ているということ完全に定義することができないのに、なぜ自分については無条件に活着ていると言えるのか。実は、最近では授業中に自分もそんなことを考えたことがある、というような学生もいる。自分の存在に対して不安を抱く学生も増えているのではないだろうか（といって具体的な調査をしたわけではないが）。

筒井康隆は、「存在の不安」に通じる「非存在感」ということについて次のように述べている。

読者がその小説を読んで現実存在である自分を虚構内存在ではないかと疑うか、そこまで及ばなくとも少なくとも作中人物が悩む非存在感に似たものを少

しでも抱くかどうかにかかっている。感覚の鋭敏なごく僅かの人間だけがほんの一瞬ではあるが時おりまるで虚構の世界に存在するかの如き非現実感を味わうことができる。

(「着想の技術」－新潮文庫－)

これは「虚構内存在であることを意識している作中人物を登場させた場合」の効果について述べたものだが、自分の存在を自明なものとせず、一瞬でも虚構の世界の住人ではないかと疑ってみること、現実には生きているということ自体を疑ってみること、そして、実はそのような「存在の不安」、「非存在感」を日常的に感じている人もいないのではないか、という点に気づくことも、本講義の目的の一つでもある。

さらに、表象文化のもととなる虚構とは何かについても確認しておかなければならない。しかも、これは同時に現実とは何か、と問うことにもなる。前述のように現実というものが自明に存在するものではなく、自らを「虚構内存在」と感じているものもいるかもしれないのである。現実と虚構とはどう違うのか。いやそもそも現代において、現実と虚構とは違うものなのかが問われているだろう。例えば、東浩紀は現実について次のように述べている。

私たちは、いずれにせよ共同幻想のなかに生きている。一般に「現実」と呼ばれているものも、その多くは、マスメディアにより供給されるコミュニケーション・ツールとしての共通知識でしかない。

現実なんていうものが幻想に先立って存在するものではない。

(『ゲーム的リアリズムの誕生』－講談社現代新書－の「7－現実」の章に付された注22より)

現実というものがア・プリオリに存在するものではない。ましてや、現実と虚構、幻想といったものを、単純に二項対立的に捉えることはできない。とすれば、現実に生きているなどということは、それ自体幻想にすぎなくなる。ただし、学生たちは日常的にこのような現実感を持っているわけではない。むしろ、素朴實在論的に現実を捉えている。生きているかを問うためには、彼等のそのような現実感にヒビを入れなければならない。また、その一つの例として、ヴァーチャル・リアリティなども取りあげている。

しかし、虚構とは何か、虚構内の人物を生きていると想像することができるのはなぜか、といったような虚構に関する基本的な問題も、これまで決定的な説明がなされていないのではないかと。無論、筆者が不勉強で無知なだけかもしれないが、このような問に明確な答えが見つかるとも思えない。

これらのことを「生きている作中人物」を考える前の下準備として学生に伝える。当然、学生たちはここで述べたようなことはこれまで考えたこともなかったろう。少なくとも、自分が生きているということは無条件に信じている学生に、生きている作中人物を想定することは困難なのである。まずは彼等の頭を思いっきり振り回す必要があるのだ。

Ⅲ

次に先に指摘した5つの「生きている条件」について述べておこう。

講義では、次のA～Eの5つの条件を提示している。

- A 作者の支配を離れて、自立している。(主観 OR 客観)
- B 作中人物と自覚している。
- C 読者が生きていると感じる。(主観)
- D 現実世界とリンクしている。
- E 物語世界で成長している。

特に順番には関係なくあげられているが、無論、これらは無条件に認められるものではなく、それぞれに問題点がある。その点も含めて、それぞれについて簡単に説明しておこう。

A 作者の支配を離れて、自立している。(主観 OR 客観)

これまで文学批評では良い作中人物の条件として言われてきたものである。例えば、レオン・サーメリアンも『小説の技法』(旺史社)の中で、次のように述べている。

作家は人物が生きた人間になる時が分かる。生きた人物は驚くほどの奔放さを示し、作家は彼が手元から離れようとする力を絶えず感じる。

作中人物が作者から自由になる時、その人物は「生きた人間になる」というのである。

これは小説だけのことでなく、マンガにおいても同様なことがある。例えば、つい最近出版された『今日の早川さん 2』(早川書房)の後書きで、作者のCOCOは次のように述べている。

もちろん出演の5人娘たちにも感謝を。キャラが勝手に動き出すというよくある形容にも、それって結局作者の意識／無意識の問題でしょと懐疑的でしたが、今回考えを改めさせられました。彼女たちは間違いなく私の中で生きています。それも元気良すぎるくらいに。

ここでも、勝手に動き出した作中人物たちを、「生きています」と述べている。

しかし、問題は、ではこのマンガを読んだ読者にとって、この人物たちは生きているのか、ということである。作者にはそのような自覚があったとしても、読者にそれが伝わるのだろうか。夏目房之介は『マンガの深読み大人読み』(イースト・プレス)の中で、『あしたのジョー』(原作梶原一騎 絵ちばてつや 講談社)の物語がある時点から自立したと指摘している。

ホセ戦を観戦している人物は、ほぼすべて梶原原作のキャラであることは、一方で『ジョー』の物語がもはや梶原一騎のものでも、ちばてつやのものでもない、自立したリアリティをもちはじめていたことの証左であると思われる。

物語が原作者などの手を離れて自立したとするのである。当然それは作中人物たちも自立して生きだしたということではないか。そして、これは作者側からの自立と言うだけではなく、読者から見ても自立していると言えるということの証左ではないか。

とはいえ、これだけでは不十分であり、いずれアンケートなどをもって具体的な検証が必要だが、その場合でも読者個々において「生きている」ということの意味がバラバラであり、同じ意味において生きていると思っているかは問題が残る。いや、そもそも読者は作中人物が生きていると自分が思っている、ということにすら無自覚である。この講義の学生たちも日頃そのようなことは考えたことがなかっただろう。つまり、「生きているか」と問われても、どのように考えて良いかということすら難しいのであり、まずは作中人物も生きているという捉え方がある、ということから理解させなければならぬというのが、現状なのである。

B 作中人物と自覚している。

これは筒井康隆の理論である。その具体例が彼の『虚人たち』（中公文庫）である。この作品について、筒井は次のように述べている

小説の主人公をまるで現実に存在する人物のように描くことは小説の前提であり読者もこれを受け入れてきたのだが、これは演劇の約束ごとを不自然であることがわかっていながら小説の読者にも強制してきたことになる。小説内での架空の人物は真に小説内での架空の人物として描かれねばならず、ひとつの小説の中の複数の人物は主人公や脇役の区別なく虚構内存在しなければならない筈である。虚構中の人物を現実の人物と同じように描写することが不可能であることを厳然とした事実として認めた上で、さらに演劇という虚構中の人物と同じような虚構内存在にしてしまうのを徹底的に避けることによって現代小説の実作者は新しい虚構内存在（この場合は作中人物）の創造ひいては新しい虚構の形式の発見に到るのではないだろうか。

（中略）

「虚構の存在であることを自覚した作中人物を登場させること」というのが第一の課題となるわけだが、この「作中人物」はもちろん作中人物すべてでなければならぬ筈である。現実存在であるわれわれが一樣にそれを疑わないのと同じように、作中人物のある者が虚構内存在であることを自覚し、ある者が自覚していないということがあってはならない。不自然である上に、それでは作中人物そのものが虚構内存在と疑似現実的存在の二種類になってしまうことにもなり兼ねない。

（『着想の技術』－新潮文庫－）

現実の世界にいる我々は、現実の世界に生きているという自覚がない。しかし、筒井は例えば、我々が夢であったら、などと考えるのは、自分が夢の中の存在ではないと考えている証拠だとする。つまり、我々は現実世界にいると実は自覚してい

るのである。とすれば、同様に作中人物だって作中人物だと自覚している必要があるというのである。

このような作中人物と自覚している例として、筒井以外では、清水義範の『私は作中の人物である』（中公文庫）などもあるし、最近の映画では自分が小説の主人公だと気づく（自覚する）マーク・フォスター監督の『主人公は僕だった』などもある。マンガにおいても、大島弓子の『綿の国星』（白泉社）では、主人公の「チビ猫」が冒頭に登場して読者に語りかける。それはこの後のDにも繋がるが、「チビ猫」は自分の描かれている姿について述べているので、作中人物と自覚しているともいえる。しかし、作中人物と自覚しているのは、虚構の人物だと自覚しているだけで、生きていけると言えるか。自覚していることは作者の支配を離れて自由になっているとも言えるが、それだけで生きていけるとは言いきれないだろう。

C 読者が生きていると感じる。

これが作中人物が活着ているという場合の最もありふれた考え方だろう。しかし、当然ながらこれは主観にすぎず、客観的に証明することはできない。場合によっては水掛け論になってしまう。また、面白いことに学生たちのレポートでは必ずしもこの例が多いわけではない。むしろ、主観なるが故に、このような例を見つけるのが困難なようである。ありふれているようで意外にこのような捉え方の方が難しいのである。

ただ、小説の中の人物を活着ていると思っている人を、描いている小説やマンガがある。例えば、芥川龍之介の『葱』（「新小説」大正9年1月）の主人公「お君さん」は作中で、徳富蘆花の『不如帰』の主人公である「浪子夫人」に「武男さんに御別れなすった時の事を考えると、私は涙で胸が張り裂けるようでございます」という手紙を書いた。「お君さん」にとって、「浪子夫人」は活着ていて、手紙を差し上げる存在だったのである。また、高野文子の『黄色い本』（講談社）は、デュ・ガールの『チポ一家の人々』を読み続ける少女田家実地子が主人公のマンガだが、実地子は物語世界に入り込んで、作中人物たちと話をしたり、小説の作中人物たちが現実世界に出てきたりしている。マンガは図像で表現されたものだから、物語世界に入り込んだのが分かりやすい。これらは虚構の中で、虚構を現実として捉える人物を描いたものである。まさに、我々もまたそのように人物たちを捉えたいのである。ただ、現実にそのような読書が行われるかは疑問が残るところでもある。けれども、ここには幸福な読者、読書が描かれていることには違いない。

また、伊藤剛の『テヅカイズデッド』（NTT出版）には、矢沢あい『NANA』（集英社）の作中人物についての次のような体験が書かれている。

私自身『NANA』に登場するハチが憎くて仕方ない、という二十代の女性の告白をきいたことがある。

現実の女性に対するのと同じように作中人物に嫉妬しているのである。この嫉妬する女性においては、「ハチ」は活着ていると言えるのではないだろうか。

D 現実世界とリンクしている。

このような例の典型として、『あしたのジョー』（講談社）の作中人物である「力石」の告別式があげられる。1970年2月15日に寺山修司の企画する力石徹告別式が行われ、700人が参列した。それは、芸能人の告別式にファンが集まるのと同様のものであり、「力石」は生きていたと言えるだろう。

このように直接現実世界に繋がるものではなくとも、マンガの場合描かれた人物たちが、直接作者や読者に語りかける、という例が多く見られる。作者も読者も現実の人物だから、その現実の人物に語りかけられるのは現実の人物ということになる。無論、それもまた作者の演出にすぎないのだが、あたかも自分の意志で作者に話しかけるのは、作者の支配を脱して自立しているかにも見られる。あるいは作品の後書きなどで、マンガの人物たちが登場して、読者からの感想などにさらに感想などを述べたりしている。読者は現実の存在で、その読者の感想に答えているのだから、彼等もまた現実の存在だと錯覚させるのである。

映画などでは、作中人物たちが映画の画面から出てきたり、映画の画面の中に入ったりのものがある（例えば、ジョン・マクティアナン監督の「ラスト・アクション・ヒーロー」など）。映画から出てくるといことは映画の外は現実と錯覚するわけで、そこにいる人物は生きていてもいえるし、すでにそのようなことは約束事ができているのだから、映画から出てくることによって映画の中の人物も生きていたということにもなる。劇中劇の効果である。また、このような例としてこの講義の最初の時間にa-haの「take on me」のミュージックビデオを見せている。この中でもコミックを読んでいた女性がコミックの中に入った、コミックの中の男性、a-haのボーカルがコミックから出てきたりしている。これは、このような例の比較的早い例ではないかと思う。

さらに、ヴァーチャル・リアリティが進んだり、コンピュータが発達することで、現実と虚構とがリンクして、その区別がつかなくなる時が来るのではないか。

E 物語世界で成長している。

先に引用したサーメリアンは作中人物の成長について次のような指摘をしている。

人は成長し、生来の性向に従って多種多様な方向に変化していく。（中略）作家は本当らしく見せるために、注意深く、少しずつ、また矛盾のないようにこの変化を展開しなければならない。

（『小説の技法』前出）

生きているならば、成長するはずであり、作中人物もまた、生きているならば作品中で成長しなければならないのである。しかし、所詮これは必要条件であって、十分条件ではない。また、マンガなどの場合、成長しなくても生きていると思わせる作中人物がいる。例えば、長谷川町子『サザエさん』（マンガ、アニメ）、さくらももこ『ちびまる子ちゃん』（集英社）、あるいは秋本治『こちら葛飾区亀有公園前

派出所』(集英社)の作中人物たちなどは、何年も経っているはずなのに、精神的にも肉体的にも何ら成長していない。(何年も経っている、というのは、物語世界の中の時間であり、連載されている期間、読者の現実の時間においてもである。)けれども、学生たちのレポートでこれらの作品をあげているものがある。とすれば、「本当らしく見せるため」には、成長させる必要があるが、成長は必ずしも絶対的なものではないことになる。

このように5つの条件について簡単に説明をしたが、最初にことわったように、どれもが生きている人物のための十分条件となっていない。そもそもは学生がレポートを書くためのヒントとして提示されたものにすぎなかったのである。ただし、現実には学生にとってこれらは絶対的な条件として受け取られていた傾向がある。また、これらは半ばランダムにあげられているものであり、相互に影響し合っている。学生のレポートでも複数の条件を挙げているものが多く見られる。

学生たちにここにあげた以外の条件を見つけろ、というのは期待し過ぎかもしれないが、実は、筆者としてはそのような期待のもとにレポートを書いてもらったのである。結果はどうであったのか、前置きがいささか長くなったが、具体的な検討に入ろう。

IV

学生が挙げてくれた例については、文末の表にまとめた。この表を見ていただければ良いのであって、余分な解説は不用と思われるが、簡単な説明をしておきたい。

作品の数は2005年度が39作品、2006年度が21作品、2007年度が24作品で、合計84作品である。(本来は作中人物の人数とすべきだが、1作品に複数の人物が登場するため、計算が複雑になるので、作品数を基準とした。また、同一作品を何人かがあげていたり、次の年に同じ作品があげられたりしており、のべ作品数となっている。)各年度で受講者数が違うので、作品数も違ってくる。また、2006年度は、j-popsの歌詞を例に挙げたものが多数見られたが(前年度にそのような例があったため)、その多くが、生きている作中人物として認められにくいもの、というよりも、そもそも作中人物と言えるかどうか、物語世界が作られていると言えるか、という根本的な部分で疑義があり、今回の例としてはのぞいてある。そのために、2006年度の数が少なくなっている。もう一つことわっておきたいのは、毎年「基本的には作中人物は生きていないと思う。」などと書かれたレポートがいくつか見受けられることである。生きていないと思うが、レポートを書かないと単位がもらえないから、とりあえず、5つの条件に当てはまるものを探してみた、ということである。だから、前述のように必ずしもここであげられている例は、純粹に学生たちが生きていると思っている例とは言えないのである。あくまでも5つの条件に即して、理論的に生きていると言える例ということになる。無論、逆にはっきりと生きていると言いきっているレポートもあるが、個々の学生にこの点について確認したものではない。今後レポートだけではなく、アンケートや面談などでさらなる確認が必要

になるだろう。まだ現段階では、どのような作品をあげるか、というよりむしろ、あげられるのか、というようなレベルである。いや、学生たちはよく作品を見つけてきたな、というのが正直な感想なのである。ただし、次のような例もある。(引用はレポートそのものではなく、レポートをもとにささか改変してある。)

作中人物が活着しているかという問に答えるためには、まず作中人物が人間なのかを考えなくてはならない。作中人物は作者が何か自分のメッセージを伝えるために意図的に作り上げた人間である。作中人物には自分たちと同じような実体があるわけではないし、読み手の想像力でその人物が作り上げられていく場合も多い。このため(中略)人間ではないように思われる。しかし、自分たちの周りにいる人間もかなり多くの部分で自分の想像力によって作り上げられているものではないだろうか。例として芸能人があげられる。彼らは実在するが自分が認識するのは彼らがでているテレビ番組やラジオや新聞、雑誌を通してであり、自分たちが見えない部分はほとんど想像である。もちろん芸能人は人間であり、活着している。ということは作中人物たちも人間であり活着していると考えてもよさそうである。

先に引用した東浩紀に言わせれば、芸能人だけではなく、そういう自分自身や周りの人間すべてが同様に想像に依存しているということになるが、この学生の捉え方は、東の指摘とさほどの違いはない。作中人物が活着していると捉えるまっとうな方法を理解していると言っても過言ではないだろう。

あげられた作品のジャンル別の数は、マンガが合計で54作品、小説が20作品、映画・アニメが8作品、その他2作品となっている。メディアミックスの作品も含んでいる。やはり、マンガが圧倒的に多くとられている。これは先に挙げた5つの条件のうち、Dがマンガに多く見られるということも関係している。そのA～Eの内訳だが、Aが18例、Bが11例、Cが18例、Dが36例、Eが15例、この5つの条件以外のものが7例である。当初、AやCが多く見られ、BやDは少ないのではないかという予測をしていたが、意外にDの数が多く、前述のようにそれらはほとんどマンガであった。これは実際に作品の例を挙げるということでは、AやCはかなり主観的であり指摘しづらく、BやD、Eというのは、具体的に例示しやすいということが考えられる。BやDやEの場合はマンガの具体的な場面のコピーが添付されていた。

さらに、5つの条件の順で具体的な作品について簡単に触れていきたい。

Aの例として、津田雅美『彼氏彼女の事情』(白泉社)をとりあげよう。この作品のラストのページ(次ページ図)に、「しぶとい人達なんで勝手にどこかで生きていこうけれど」という作者の言葉がある。これも先に述べた作者から見た「活着している作中人物」ということになるだろう。「生きていこう」とあるが、それはすなわち、すでに作者の中で作中人物たちが生きていたということである。作中人物を主体に考えれば、これから彼らは物語世界を離れて、自由に生きていくと



いうことにもなる。読者について考えるなら、この作者の言葉にどれだけ同感するか、ということになるだろう。無論この作品をあげた学生はその通りと同感したということである。また、読者からこの作中人物たちに宛てた手紙も紹介されており、読者にとっても生きているということにもなる。

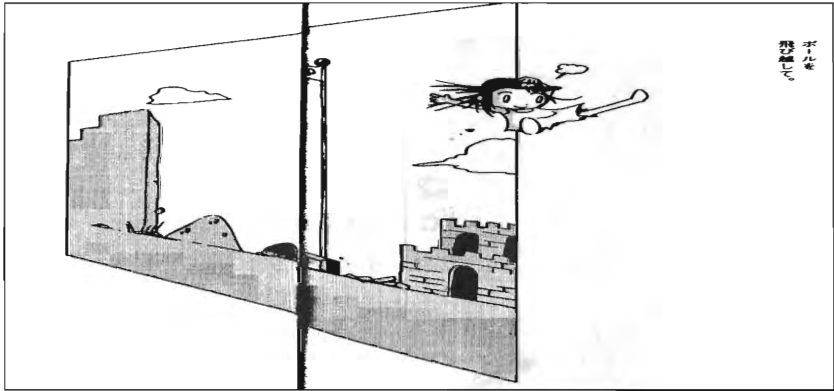
また、この同じページにあたかもこの作中人物たちからのメッセージとして「読んでくれてありがとうございます」という言葉がある。これはBの作中人物と自覚しているということになるし、また、読者に向かっての言葉とすれば、Dの現実と繋がっていると受け取れるのである。因みに、このレポートの読者は、作中人物たちは生きていると考えているのであり、それはCということにもなる。ただし、本人も

「どうしても主観が入りがちになってしまう」と述べている。

また手塚治虫のマンガでは、「ヒゲオヤジ」や「ランプ」などの何人かの作中人物が、むしろ、キャラという方がふさわしいのだが、いろいろな作品で違う役に扮して登場している。それを手塚は意図的に行い、「スターシステム」と呼んでいる。ちょうど筒井康隆の『虚人たち』もそのような構想で作中人物たちを捉えている。これは、作中人物たちが作品から自由になっていて、自立しているとして捉えることができるのではないかと、ということである。しかし、作品から自由であったとしても、作者から自由か？ということになると、疑問が残る。

この他、いがらしみきおの『ほのほの』（竹書房）の例では、第29巻で主要人物の一人「アライグマくん」が旅に出る。100ページで「アラクグマくんは 帰ってこなかった」とある。これは「アライグマくん」が作者の支配を離れて、自立したようにも読める。ただし、第30巻で「アライグマくん」は帰ってくるので、結果としては自立していなかったことになる。ただ、雑誌連載中や29巻を読んだ時点では自立したとも読める。

もう一つ、西島大介の『アトモスフィア』（早川書房）では作品の最後で、主人公が物語世界を思わずフレームから飛び出る絵がある（次ページ上図）。ただし、飛び出た先はまだ作品内であって、作者から自立したとは言いかねるところもある。いわば、物語世界からは出たが、作品から出てはいないということである。（作品から消えたら完全に自立したことになるが、それを描くことはできない。）



Bの例の典型的なものに矢沢あいマンガがあげられる。(そのため2007年度から矢沢あいのマンガははずすように指示している。)

矢沢あいの『ご近所物語』(集英社)では、完全版第4巻の途中(172ページ)で作中人物たちが「もうすぐ最終回」と言ってさわいだりしている(左図)。この他にも第1巻では「こいつ主役なのにこんなカオで一かなー」という言葉もあって、作中人物としての自覚があると言える。

また、先の『彼氏彼女の事情』のように、作中人物が読者に語りかけるというのも、一つの例としてあげられるが、これはDという捉え方もできる。

Cについては、前述のように主観的なものとなる。例えば、ひぐちアサ『大きく振りかぶって』(講談社)について、「人間の心情を丁寧に描いている」とか、「作品以外での生活が伺える場面が多くある」という指摘がある。学生たちは友達の24時間を知っているわけではなく、自分の知らない時間にも友達が活動していると思っている。作中人物たちも、作品で描かれている時間以外にも、当然生活しているはずで、ましてや生きている作中人物となればそのような描かれていない時間の生活をも読者に想像させる。また、このマンガは高校野球を描いたものだが、モデルの高校がはっきりしていたり(D)、作品中でそれぞれの人物の成長が描かれたりもしている(E)。また、矢沢あいの『NANA』の現実に対する影響についてすでに触れたが、学生のレポートでも『NANA』があげられている。『NANA』の人物たちが生きているということについて、「時間の継続に依存している、人間

らしさがある、読者の共感を得ている」という点を指摘している。この他には、二ノ宮知子『のだめカンタービレ』（講談社）の演奏シーンが自然に見えるなどの指摘もあるが、概して前述のようにこのCの例は少ない。因みに、この作品に出てくるオーケストラのCDが現実に発売されていて、これはDにあたる。



Dについて、ここでも矢沢あいの『NANA』があげられている。例えば、単行本の後書きに当たる「淳子の部屋」が典型的である（左図）。「淳子」は『NANA』の脇役の一人である。まず、ここで淳子が「出番がない時でもあたしはあたしの生活があるのよ!」と言っていることに注意したい。作中人物たちにも生活がある。作品に登場していなくても、生きていれば生活しているのである。この後には、読者からのイラストが飾られる。読者は現実の存在だから、イラストを見ることができるのは現実の存在だという理屈になる。ただし、この場面は「おまけのページ」とあるように、後書きにあたるところで、物語世界から人物たちが出てきているともいえる。しかもこの後、彼らは現実にあるお店に食事をしに出かける。また、これまで出版された作品の間違いなどについての読者の指摘も紹

介している。これは、Bにも繋がるが、マンガ自体は現実に印刷しているのだから、ここでも作中人物たちは現実に存在していることにもなる。あるいは、「出番」とあったように、『NANA』においてある役を演じているにすぎないとも考えられる。

この他の例としては谷川流の『涼宮ハルヒの憂鬱』（マンガは角川書店、アニメ、小説もある）では、作品の中に「ハルヒ」の高校のS.O.S団のホームページを作成する話があって、実際にインターネット上にS.O.S団のサイトがある。しかも、それは本来「涼宮ハルヒの憂鬱のオフィシャルサイト」なのである。オフィシャルサイトをわざわざ作品中のサイトと重ねるために「S.O.S団のサイト」としているのであり、しかも、オフィシャルサイトとしてはかなり稚拙な感じのものになっていて、素人の高校生が作ったというマンガの設定を反映したものになっている。マンガの世界（高校）が現実にあるかのように錯覚させようとしているのである。当然、作中人物たちも生きていくことになる（錯覚する場合もある）。

また、三田紀房の『ドラゴン桜』（講談社）はそもそも現実にある東大受験がテーマとなっている上に、実際にある参考書や予備校などが、それとわかるように具体

的に登場している。マンガ自体が入試の参考書になるように計算されていて、まさに現実と繋がっているのである。例えば、ブログなどで受験に使った参考書などの受験体験記を読むことと、このマンガを読むこととの差はほとんどないのではないか。ブログの場合書いている人を想定して読んでるのであり、その点でこの作品の作中人物たちは現実の受験生と同じように生きていると言えるのではないだろうか。少なくとも、そこに決定的な違いがあるとは言えないのである。

Eの例としてはすでに、ひぐちアサ『大きく振りかぶって』などの例について触れた。特に少年マンガの場合主人公たちの成長というのはそもそもの主題と言える。先にも触れた『あしたのジョー』もそうである。羽海野チカ『ハチミツとクローバー』（集英社）も大学生たちが成長する過程そのものが主題になっているものである。むしろ、学生たちがこれらの例をあまり挙げていないことは注目すべきかもしれない。その理由としてはすでに述べたように、成長するというのが生きている作中人物の必要条件ではあっても、十分条件にはならないということが考えられる。

5つの条件以外の例についても触れておこう。残念ながらこの種の指摘は少なかった。

まず、鬼頭莫宏の『はくらの』（小学館）。このマンガはある日突然巨大ロボットに乗って、侵略してきた同じようなロボットと戦うことになった中学生たちが主人公のマンガだが、戦う相手もまた中学生が操縦したものだ。相手からすればこちらが侵略者ということになっているのであり、世界はパラレルワールドになっている。この作品を取りあげた学生はマンガではなくアニメについて「このように考えられないだろうか。つまり今私があるこの世界も無数にある平行世界の一つであると。そしてアニメの作中世界も平行世界の一つである。」と書いている。つまり、自分たちの世界だけが絶対的なものではなく、自分たちの世界とは関係なく異質の世界が同時に存在して、そこには自分たちと同じように生きている人間がいることが考えられるのであり、マンガやアニメの物語世界もまたそのような世界の一つとして捉えられるのではないかということである。作中人物たちは我々の世界の価値観では生きていないと思われても、物語世界という別の世界では生きているかもしれないのである。これは生きている作中人物を考える上で一つの有効な考え方になっていくと思われる。今後さらに検討していきたい。

もう一つ別の例では、死ぬということが生きていることの証明になるということがあげられている。例えば、鳥山明の『ドラゴンボール』（集英社）などが代表的なものである。これは生きていることの逆証明ではあるが、作品中で死んだものがすべて生きていたと読めるか、ということになると疑問が残る。先ほどの「力石徹」の例もあるが、あくまでも一つの観点ではあっても、単純に生きている条件とすることはできない。

もう一つ、おもしろい、というか困った例を挙げよう。それは「トトロ」である。

宮崎駿の『となりのトトロ』では、純粋な子どもにしか「トトロ」は見えないことになっていて、いないと言え、純粋な子どもではないから、ということになって、生きていることを否定できないことになる。これ自体はなかなか面白い例ではあるが、本稿の趣旨とはいささかはずれた例となっている。

以上、学生たちがあげてくれた例の説明としては、触れられた作品がいかにも少なくて申し訳ないが、作品全体にかかわるものが多く、簡単に説明できないものや、同様の例については省かせていただいた。具体的な作品に直に当たっていただければと思う。

V

作中人物が生きていることを客観的に示すことはできるのか。学生のレポートにあげられていた作品・作中人物は、最初にも述べたようにすでに与えられた5つの条件に即したものがほとんどであり、例外的なものとして、パラレルワールド、死ぬこと、があげられていた。死ぬというのは、成長すると言うことと同様に、必ずしも生きていることの証明にはならない。パラレルワールドは、具体的な人物が生きているかどうかを判定する上では有効ではないが、筒井康隆の『虚人たち』にも繋がる作中人物全体の捉え方として重要であると考えられる。特に自分たちの価値観だけで生きているかどうかを決めるのではなく、別の価値観によっては生きている場合もあるとするのは、物語世界の中では作中人物はいきているということにも繋がるだろう。前述のように学生たちにはそもそも作中人物が生きている、などという発想すらないのだから、このような考え方によって生きているという捉え方の根拠が提示できるだろう。また、一つの価値観に拘泥しないという考え方自体も、この講義を通して学生に伝えたいものの一つでもあった。

5つの条件については、具体的な例を示したが、Aについては、作者において作中人物の自立は認識できても、やはり読者には困難であった。無論、我々が注目したいのは読者の側であり、さらに具体的に示すことができないか検討する必要がある。その中で『アトモスフィア』の例は、作者の計算ではあるが、作中人物が物語世界から出たことが明確に解るものであった。Bの例については、筒井の理論は興味深い、作中人物と自覚しても、所詮作中人物にすぎなくて、生きていると言えるか疑問が残ってしまう。ただし、先に述べたパラレルワールドという考え方はこの点で有効だと考えられる。またマンガの例では、Dと重なってしまう。作中人物と自覚していることは、現実の漫画の中の人物と自覚することにもなる。Cについては、主観にすぎないという一言ですんでしまうが、さらに、なぜ自分はそう思ったか、そう思うための要素、コードなどはあるのか、これもさらに具体的な検討が必要になる。また、雑誌には読者からの反応が書かれており、そこにはあたかも作中人物を生きている人物と捉えている例が見受けられる。今回は作品をあげさせた結果、そのほとんどが単行本による指摘であり、雑誌によるものはほとんどなかつ

た。雑誌への投稿などからの調査も視野に入れるべきだろう。Dの例は多く見つけられたが、すべては作者の計算によるものであり、いわば、作者と読者の間の御約束ごとなのである。現実にいる作者に話しかけたとしても、それはマンガの中、物語世界の中の話で、現実と繋がっているわけではない。むしろ、作者を絶対的に現実の存在とすることの方が問題かもしれない。Eについてはすでに何度か言及したように成長するというだけでは不十分だろう。そもそも我々は目の前にいる人間や動物をその場で生きていると判断するのであり、成長をふまえて判断しているのではない。つまり、物語世界で時間が経過する場合に、成長ということが必要条件となって来るということである。しかし、一方で例としてあげた『サザエさん』や『ちびまる子ちゃん』などのように、時間が経過しているはずなのに、成長していなくとも生きていると思う場合もある。そもそもそれはなぜか、という問題もあるが(これは先に述べた、目の前の例に近い)、成長とは、時間の経過が意味を持つようなある物語・作中人物についてだけ有効な要素ということになるだろう。

もう一つ、先に述べたことで、大きな問題が残っている。それは、学生たちは純粹に生きていると思っていたのか、ということである。「サザエ」さんを生きていると本当に学生は思うのだろうか。その生きているということは、ある種の御約束ごとではないか、とも考えられる。現実とは別の意味での生きているということがあるのではないか。現実にはあり得なくとも、マンガでは許される。現実には成長しない人間はいないが、マンガならばあり得るのであり、そのようなリアリズムを読者が共有していれば、そのことに違和感を覚えない。果たして学生個々において、所謂「自然主義的リアリズム」でマンガなどを読み、かつ「生きている」と考えているのか、そうではない、マンガ的なリアリズムによって読んでいて、生きていると思ったのか、さらに詳しい調査が必要になる。

どうも、考察というよりは、問題点の提示で終わってしまったが、今年度もこの授業は開講中であり、今後も続けていく予定なので、さらに、今後の授業の成果も含め、改めてこのテーマについて論じてみたい。

< 2005年-1 >

| | 作品・作者 | 人物 | ジャンル | 理由 | 備考 |
|----|------------------------------|------------|----------|---|-----|
| 1 | 手塚治虫「鉄腕アトム」 | アトム | 漫画 | 作者とアトムとの対話がある。 | D |
| 2 | 高橋葉介「夢幻紳士」 (徳間書店) | 福音温子 | 漫画 | 作者につっこみを入れている。 | D |
| 3 | 秋本治「こちら葛飾区亀有公園前派出所」(集英社) | 両津勘吉 | 漫画 | 時代の流れに沿っている。 | D |
| 4 | 渡瀬悠宇「ふしぎ遊戯」 (小学館) | 結城美朱 | 漫画 | 日常がすべて書かれている。「生きている」という読者の感想。作者の予定と違う結末。 | A、C |
| 5 | 手塚治虫 | ヒゲオヤジなど | 漫画 | 同じキャラが他の作品にも登場する。 | * |
| 6 | 河下水希「いちご100%」(集英社) | | 漫画 | 人物の成長。作者の予定と違うであろう結末。 | A、E |
| 7 | 矢沢あい「NANA」 (集英社) | | 漫画 | 「淳子の部屋」 | D |
| 8 | 井上雄彦「SLUM DUNK」 (集英社) | 桜木花道 | 漫画 | 実在の高校で続編が書かれた。主人公の成長。(31巻で初めてパスをだす。) | D、E |
| 9 | あだち充「H2」 (小学館) | | 漫画 | 作者につっこみを入れている。 | D |
| 10 | 矢沢あい「ご近所物語」 (集英社) | | 漫画 | 「もうすぐ最終回」と言っている。「主役としての自覚が足りぬ」と言われている。 | B |
| 11 | 矢沢あい「天使なんかじゃない」(集英社) | | 漫画 | 作者が登場する(第3巻)「りぼん」という掲載誌を知っている。(第4巻) | D |
| 12 | 大暮維人「天上天下」 (集英社) | 風宗一郎 | 漫画 | 「一応主人公らしー」と言っている。 | B |
| 13 | さくらももこ「ちびまるこちゃん」(集英社) | さくらももこ | 漫画 | 「COI-COI」の中に登場している。作者である(未来の)実在のさくらももこに会いに来る。 | D |
| 14 | 日高万里「世界でいちばん大嫌い」(白泉社) | | 漫画 | 「その読者諸君」など、読者に語りかける。 | D |
| 15 | 鳥山明「ドラゴンボール」 (集英社) | 悟空 | 漫画 | 悟空が死ぬから。(死ぬということは生きていること。)(第17巻) | * |
| 16 | いがらしみきお「ほのぼの」(竹書房) | アライグマくん | 漫画 | アライグマくんが途中で旅に出て帰ってこなくなるのは、キャラの自立ではないか。 | A |
| 17 | 和月伸宏「るろうに剣心」 (集英社) | | 漫画 | 作者に文句いったりしている。 | D |
| 18 | 前川涼「アニマル横町」 (集英社) | | 漫画 | 作者に話しかけたり、キャラが漫画から出てきたりする。 | D |
| 19 | 荒川弘「鋼の錬金術師」 (スクウェア・エニックス) | マース・ヒューズ中佐 | 漫画 | 途中で死ぬが、読者に強い印象を与えた。 | C |
| 20 | 藤崎竜「封神演義」 (集英社) | | 漫画 | 作者との会話がある。 | D |
| 21 | 長谷川町子「サザエさん」 | | 漫画 TV | 作者が登場する。視聴者とジャンケンをする。 | D |
| 22 | あだち充「タッチ」 (小学館) | | 漫画 | 作者が登場する。 | D |
| 23 | 荒木飛呂彦「ゴージャス・アイリン」(集英社) | | 漫画 | 「アイリン」の行方が分からなくなっている。 | A |

<2005年-2>

| | 作品・作者 | 人物 | ジャンル | 理由 | 備考 |
|----|------------------------------------|----------------------------|----------------------------|--|------|
| 24 | 西加奈子「さくら」(小学館) | 兄ちゃん | 小説 | 物語の中で生きていた。 | C |
| 25 | 中島らも「夜走る人」(講談社文庫) | 車さん | 小説 | 幽霊だけど、自分の存在を自覚している。 | B |
| 26 | アーサー・コナン・ドイル「シャーロック・ホームズ」 | シャーロック・ホームズ | 小説 | ホームズの死に対して、殺さないで、という大反響があった。 | D |
| 27 | メアリー・シェリー「フランケンシュタイン」 | | 小説 | 成長して、自我を確立している。 | A. E |
| 28 | P.D.ジェイムズ「女には向かない職業」(ハヤカワ・ミステリィ文庫) | コーテリア・グレイ | 小説 | 成長し、自立する姿が描かれている。 | A. E |
| 29 | マイケル・オランダージェ「イギリス人の患者」(新潮文庫) | ハナ | 小説 | 作品の最後で作者が「ハナ」について語るのが、実在の人物について語っているようだから。 | D |
| 30 | ジェリー・スピネリ「スターガール」(理論社) | スターガール | 小説 | 「彼女の姿を見たものはだれもない。」(→「羅生門」) | A |
| 31 | 村上春樹「ノルウェーの森」(講談社) | 「僕」 | 小説 | 「僕」は作品の最後で、誰(作者)にも分からない未来を抱えた存在になっているから。 | A |
| 32 | 宮部みゆき「理由」(朝日新聞社) | | 小説 | それぞれの人物が複数の視点から描かれている。 | * |
| 33 | アン・フラッシュェアーズ「トラベリング・パンツ」(理論社) | | 小説 映画 | 主人公たちが成長している。読者が生きているように思える。 | C. E |
| 34 | 田中秀樹「劇電伝」(講談社) | | 小説 漫画 (CLAMP) アニメ | 4兄弟に読者からのプレゼントが届く。あとがき座談会。 | D |
| 35 | 鈴木光司「リング」(角川文庫) | 貞子 | 小説 映画 | 読者に実在と思わせる。 | C. D |
| 36 | 「古畑任三郎」 | 古畑任三郎 | TV | 視聴者に話しかけたり、視聴者からの手紙を読んだりしている。 | D |
| 37 | 森本梢子「ごくせん」(集英社) | ヤングミ | 漫画 TV | ファッションが現実世界に影響。教師としてあこがれの存在となっている。 | D |
| 38 | 「ラスト・アクション・ヒーロー」(1993年) | ジャック・スレイター(アーノルド・シュワルツネガー) | 映画 | 少年タニーが魔法のチケットで映画の中に入る。ジャックが犯人を追って現実世界に出てきた後、もう一度映画に戻る。 | D |
| 39 | 「Friend of mine」(GLAY) | 歌詞 | J-POPS | 「僕が僕を苦楽する。」 まるで僕が二人いるよう。 | B |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |

*作品はジャンル別にまとめたが、各ジャンルにおける順番はランダムである。(以下の表も同様。)

<作中人物は生きているか> 2006年

| | 作品・作者 | 人物 | ジャンル | 理由 | 備考 |
|----|------------------------------|-------------|----------------|--|--------|
| 1 | あだち充「タッチ」(小学館) | 上杉達也 | 漫画 | 作中人物と目覚している。 | B |
| 2 | 矢沢あい「NANA」(集英社) | NANAなど | 漫画 | 時間の経過性に依存している。人間らしい。 | C |
| 3 | 佐々木倫子「動物のお医者さん」(白泉社) | 西根公輝 他 | 漫画 | 絵がリアル。ハスキー犬ブームになった。(現実に影響した。) | C、D |
| 4 | 壽林知「今日からマのつく自由業」(角川書店) | 渋谷有利 村田健 | 漫画 | アイデンティティをもっている。 | A |
| 5 | 「テニスの王子様」(集英社) | 越前リョーマ | 漫画 | 現実とリンクしている。心身の成長がある。 | D、E |
| 6 | 渡瀬悠子「ふしぎ遊戯」(小学館) | 鬼宿(たまほめ) | 漫画 | 作者の支配から自由である。 | A |
| 7 | 古屋美「行け 稲中卓球部」 | | 漫画 | 生き生きと描かれている。 | C |
| 8 | 井上雄彦「SLUM DUNK」(集英社) | 桜木花道 | 漫画 | 作中人物が恋愛している。身長が伸びている。 | D |
| 9 | 矢沢あい「天使なんかじゃない」(集英社) | 雅志 | 漫画 | 自立している。 | A |
| 10 | 矢沢あい「ご近所物語」(集英社) | | 漫画 | 「ご近所物語」で実果子等が本から飛び出して、現実の声優に会いに行ったりしている。 | D |
| 11 | はやみねかおる「夢水清志郎事件ノートシリーズ」(講談社) | 若嶋亜衣 | 小説 | 読者に話しかける。成長している。設定などがリアル。 | C、D、E |
| 14 | 江国香織「ウエハースの椅子」(ハルキ文庫) | 「私」 | 小説 | 主人公の存在がリアル。作者と重なっている。どこかに実際に居そう。 | C、D |
| 15 | ミヒヤエル・エンデ「はてしない物語」(岩波書店) | バスチャン | 小説、映画 | 作品の中で本を読みことで本の世界が広がっている。 | * |
| 16 | 坂木司「青空の卵」(東京創元社) | 坂木司 鳥井真一 | 小説 | 現実とリンクしている。(作者と同名) 作品中で成長している。人間くさい。 | C、D、E |
| 17 | 市川拓司「いま、会いにゆきます」(小学館) | 漣 | 小説、映画 TV、漫画 | 幽霊でも生きている。欲望がある。愛されている。涙を流す。 | C * |
| 18 | 宮崎駿(監督・原作・脚本)「となりのトトロ」 | トトロ | 映画 | 存在しているが、純粋な子どもの目にしか見えない。 | * |
| 19 | 「アイランド」 | | 映画 | クローンでも自分の意志で動いている。 | A |
| 20 | Mr.children「PADDLE」 | | 歌詞 | | |
| 21 | 「hack」 | | PS2ソフト | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |

〈作中人物は生きてるか〉 2007年

| | 作品・作者 | 人物 | ジャンル | 理由 | 備考 |
|----|-------------------------------|---------------|----------|--|-----|
| 1 | 空知英秋「銀魂」(集英社) | 坂田銀時 | 漫画 | 作中人物だと自覚している。 | B |
| 2 | 森田まさのり「ROOKIES」(集英社) | 川藤幸一 | 漫画 | 普通に生きている人間と同じような努力をしている。また、技術が向上している。 | C、E |
| 3 | 羽海野チカ「ハチミツとクローバー」(集英社) | 竹本 | 漫画 | 作品中で成長している。 | E |
| 4 | 高須賀由枝「グッドモーニング・コール」(集英社) | 吉川菜緒・他 | 漫画 | 実在の物や場所が登場する。実在の人物が登場する。 | D |
| 5 | 美森青「B.O.D.Y.」(集英社) | 藤 | 漫画 | 読者が作中人物に恋している。作者から自立している。 | A、C |
| 6 | ひぐちアサ「おおきく振りかぶって」(講談社) | 三橋廉 | 漫画 | 現実(高校)と繋がっている。心理がリアル。 | C、D |
| 7 | 吉住渉「ママレードボーイ」(集英社) | 小石川光希 | 漫画 | フリーページ。成長している。 | E |
| 8 | 井上雄彦「SLUM DUNK」(集英社) | 桜木花道 | 漫画 | 主人公の成長。(31巻で初めてパスをだす。)作中人物だと自覚している。 | B、E |
| 9 | 尾田栄一郎「ONE PIECE」(集英社) | ルフィー・他 | 漫画 | 作中人物が自立している。読者が生きていると感じる。 | A、C |
| 10 | 柴田亜美「南国少年パプワくん」(ENIX) | パプワ・他 | 漫画 | 作品世界を「現実」としている。作中人物だと自覚している。 | B、D |
| 11 | 小花美穂「こどものおもちゃ」(集英社) | 倉田紗南 | 漫画 | 独自性や自立性がある。漫画の中にいると自覚している。 | A、B |
| 12 | 西島大介「アトモスフィア」(早川書房) | 主人公 | 漫画 | 最後に漫画のコマの中から飛び出している。 | D |
| 13 | 津田雅美「彼氏彼女の事情」(白泉社) | 有馬総一郎 | 漫画 | 作者が「勝手に生きていく」と述べている。作中人物だと自覚している。 | A、B |
| 14 | 日高万里「V・Z・ローズ」(白泉社) | 城井あげは 秋吉万葉 | 漫画 | 「世界で一番大嫌い」の人物たちが成長した姿が書かれている。 | E |
| 15 | 木城ゆきと「銃夢(ガンム)」(集英社) | ガリィ | 漫画 | 「私の至は私自身だ」と言っている。成長している。 | B、E |
| 16 | 鬼頭莫宏「ぼくらの」(小学館) | | 漫画 | 平行世界が描かれている。(この世界も平行世界かも。) | * |
| 17 | 高屋奈月「フルーツバスケット」(白泉社) | 本田透 草壁一家 | 漫画 | 最終巻で作者が「物語って生物だなあ」と言っている。 | A |
| 18 | 三田紀房「ドラゴン桜」(講談社) | 桜木健二・他 | 漫画 | 現実とリンクしている。(東大、河合塾、受験参考書) | D |
| 19 | 二ノ宮知子「のだめカンタービレ」(講談社) | 野田恵 千秋真一 | 漫画 | 演奏シーンにリアリティがある。現実にはCDが出ている。 | C、D |
| 20 | 藤崎竜「封神演義」(集英社) | 太公望 | 漫画 | 「わたしこそが主人公だと知らしめる」と言っている。(作中人物の自覚がある。) | B |
| 21 | 戸部けいこ「光とともに…～自閉症児を抱えて～」(秋田書店) | 東幸子 | 漫画 | 作中人物の心理や行動が自然である。 | C |
| 22 | 佐藤多佳子「一瞬の風になれ」(講談社) | 神谷新二 | 小説 | 精神的・肉体的に成長。実在の場所や人名がある。 | D、E |
| 23 | 谷川流「涼宮ハルヒの憂鬱」 | 涼宮ハルヒ | 小説 漫画 | 我々の世界とリンクしている | D |
| 24 | カミュ「異邦人」(新潮文庫) | ムルソー | 小説 | 現実世界を生きていると自覚している。 | A |